

「手」のアイロニー
 — 『エセルバータの手』論 —

宮崎隆義

Irony of the 'Hand'
 — A Study of *The Hand of Ethelberta* —

Takayoshi Miyazaki

Abstract

The Hand of Ethelberta (1876) has generally been criticized as a failure and an execrable work of Thomas Hardy's. Regardless of its low estimation, however, the ironical title seems to give us a key to a fuller appreciation of the novel. A tentative reevaluation of the work is intended in this paper.

Young widow Mrs Petherwin, i.e. Ethelberta, is in fact a daughter among the ten children of Chickerel, a servant. The ambitious Ethelberta is to choose a good husband among the four suitors. The 'hand' of Ethelberta is of course a symbol of the acceptance of marriage. Ironically enough it is not the 'hand' of 'Mrs Petherwin' of the high society. The servant's daughter Ethelberta has become Mrs Petherwin by marriage and she manages to be that strictly hiding her real origin. Her performance as an excellent story-teller at a theatre to get livelihood to maintain her family overlaps her performance as Mrs Petherwin in the upper society. The proud and aspirant Ethelberta uses her 'hand' most tactfully to have a good husband of property. She finally gives her 'hand' to Lord Mountclere and becomes lady Mountclere. After marriage, however, she is not meek nor submissive to her husband, but oppresses him and controls his estate. The comical reverse change of the husband/wife relation seems to mirror, as one critic suggests, the subversive change of the structure of the society at that time. If Hardy's ambition to be a good 'hand' at a serial at the time of the composition is displaced on to Ethelberta, the 'hand' of Ethelberta may be in reality his 'hand' to have a subversive influence in the reading society of the day.

I

Thomas Hardy は、月刊雑誌 *Cornhill Magazine* に匿名で *Far From the Madding Crowd* (1874) を連載し、その作品によって小説家としての地位を確立したが、その次にトマス・ハーディと名前を掲げて連載した *The Hand of Ethelberta* (1876)¹⁾ は、新進作家に対する批評家たちの期待を裏切るような作品となってしまった。「失敗作」(a failure)で「実にいやな」(execrable)作品だとしばしば酷評されてはいるが、批評家たちの中でも、特にハーディに心酔する傾向のある批評家、例えば Richard H. Taylor などは、それでもこの作品に価値を認めるべく、ハーディの個々の作品が集合体として一つの完全体をなしていると思ふ、その集合体の中で果たしている役割を見いだすことによってこの作品の価値を推し量ろうとしている²⁾。

確かに、匿名という形で作品を発表するということには、出版社側に限らずハーディ自身にも作家としての将来をその作品に賭けてみるほどの緊張が伴っていたはずであり、さらにその2年後に、新進の作家として、雰囲気も舞台もそれまでとはまるで違った風習劇(comedy of manners)のような喜劇作品を次作として連載することには、大きな冒険を孕んでいたであろうと思われる。『狂乱の群れをはなれて』を発表した頃、連載雑誌『コーンヒル・マガジン』の編集者である Leslie Stephen に、ハーディは次のような手紙を書き送っている。

The truth is that I am willing, and indeed anxious, to give up any points which may be desirable in a story when read as a whole, for the sake of others which shall please those who read it in numbers. Perhaps I may have higher aims some day, and be a great stickler for the proper artistic balance of the completed work, but for the present circumstances lead me to wish merely to be considered a good hand at a serial.³⁾

-
- 1 テキストは The New Wessex Edition, *The Hand of Ethelberta* (London and Basingstoke: Macmillan, 1976) を使用。本文中の引用は全てこの版に依る。
 - 2 'It is surely wrong to isolate the lesser novels as separate and distinct, as aberrations and failures. They play an essential part in the dynamic process of the development of Hardy's fiction, and each stage of his career contributes to the integrity of the whole. To exclude the seven less successful novels is to distort his career and to disguise the interpenetrating unities of his fiction.' *The Neglected Hardy: Thomas Hardy's Lesser Novels* (London and Basingstoke: Macmillan, 1982), p.3.
 - 3 Richard Little Purdy and Michael Millgate (ed.), *The Collected Letters of Thomas Hardy, vol.1, 1840-1892* (Oxford: Clarendon Press, 1979), p.28.

「現在の状況」(the present circumstances)、つまり結婚後間もないハーディにとって、経済的な面から考えても作家としての地位を確保することが第一の関心事であったろうことは推測できるが、編集者に上述のような手紙を宛てたハーディの真意は、後段に述べている「連載物のうまい書き手」(a good hand at a serial)になるということよりはむしろ、前段の部分に今後の可能性としてほめかされている、「いつかより高い目標を持つかもしれない」(I may have higher aims some day)という部分に込められていたのではないだろうか。さらには、「真に芸術的なバランスのとれた完成された作品」(the proper artistic balance of the completed work)を生み出せるようなより高い目標というものを、実はその頃もう既に持っていたということの表明だったのではあるまいか。というのも、いかにもその頃の読書界に迎合するように連載という形式で作品を発表しながらも、『エセルバータの手』という作品そのものは、前作の『狂乱の群れをはなれて』とは全くといってよいほどの違った世界を描いているからである。その点では、*Under the Greenwood Tree* (1872)から『狂乱の群れをはなれて』に到って「ウェセックス」(Wessex)という、目新しい新鮮な架空の小説の舞台を紹介し、読書界にさらにその続編のようなものを期待させておきながら、その期待を裏切ることによって迎合を拒否しているともいえるのである。確かに「連載物のうまい書き手」であるということを示しながら、描かれた作品の世界そのものは、読者の期待や好みに阿らない、常に建物の全体像を念頭に浮かべている建築家たるハーディの、独自の体系をなす全体像に基づいたものに他ならないだろう。

Robert Gitting によれば⁴⁾、恐らくハーディは前作『狂乱の群れをはなれて』に対する批評に反発するかのようにこの作品を書いたのではないかと考えられる。『狂乱の群れをはなれて』によってハーディは、小説家トマス・ハーディとして文壇に地位を確立したが、それは都会から離れた田舎「ウェセックス」という別世界を舞台として、George Eliot と同じように方言を駆使する作風によってである。ハーディは、自分の匿名の作品がジョージ・エリオットの手によるものではないかと憶測されたために、あえて彼女の作風とはまるで違う作品にし、舞台も田舎を出来るだけ避けてロンドンに比重を置いたと考えられるというのである。さらに、ハーディは『狂乱の群れをはなれて』によって一躍新進の作家になり、レズリー・スティーヴンを中心とする文学サークルの仲間入りをしたが、この作品には当時のハーディが置かれていた状況がそのまま作

4 Introduction to The New Wessex Edition, pp.15-27.

中のエセルバータに反映されているのではと、ハーディの伝記を著した人らしい見方をしている。作品名である‘The Hand of Ethelberta’の‘Hand’には、ハーディの母方の姓‘Hand’が込められているのだろうという点については、面白いというしかないが、少なくともハーディの実際の境遇とエセルバータの境遇には共通するものがある。

ともあれ、『エセルバータの手』という作品には、雑誌連載という形によって、ハーディの連載小説の書き手としての力量が示されているばかりでなく、後の数々の作品に表され発展させられるテーマを探っている節が見られるのである。それを端的に示しているのが、他でもないこの作品の非常にアイロニカルなタイトルそのものではないだろうか。

II

「若きペザウィン夫人」(young Mrs Petherwin, p.33)として登場するエセルバータは、実は貧しい召使チックレル(Chickerel)の10人の子供の内のひとりである。美貌と才能にあふれたエセルバータは、家庭教師としてペザウィン家に入り、そのまだ成人していない一人息子と秘かに結婚をしたが、新婚旅行中にその夫は死んでしまい、結婚に反対したペザウィン卿も後を追うように死んでしまう。19歳にして未亡人となってしまったエセルバータは、孤独となったペザウィン卿夫人の同情を得て、実の母娘のように一緒に暮らしている。物語は、この若き美貌のペザウィン夫人たるエセルバータが、彼女に求愛する4人の男たち—Christopher Julian, Ladywell, Neigh, Lord Mountclere—の中から誰を結婚の、再婚の相手として選ぶかを軸として展開する。エセルバータの「手」は、求愛する男たちにとって、渴望の的となっているのである。彼女の「手」というまでもなく、結婚受諾の象徴である。物語の冒頭に見られる、鷹が野鴨を追いかけるシーンは(pp.37-8)、物語全体の基調となるイメージを生み出す重要なものであるが、4人の求愛者たちは、あたかも鷹のように野鴨のエセルバータを追いかけるといえる。

ハーディのほぼ全作品に共通するテーマのひとつは、結婚であり、結婚相手の選択の如何にあるとあってよいだろう。ハーディの場合、動物性に根差す性に衝き動かされる男と女の恋愛に、人間個人としての性格の相違ばかりでなく、その男女が置かれている社会の規範や価値観、いわば社会的存在である人間の、その社会的な立場などが複雑に絡み合ってくる。それには、都会と田舎という地域性の違いや、社会における階級の違いや教育や貧富の差なども含まれるが、そうした諸々の状況から浮かび上がってくるのは、ほとんど常に衝動による結

婚相手の誤った選択(mismatching)の問題であり、身分違いの結婚(mésalliance)の問題であるといつてよい。『エセルバータの手』の前後の作品を眺めてみても、例えば、『緑樹の陰で』において、主人公 Fancy の結婚の迷いは、都会的なものと田舎的なものとの選択にあった。結果的に、自分と同じ田舎的な属性を持った Dick と結ばれるが、彼女が都会的な属性を持った Maybold へ一時的にせよ傾いて迷ったことは彼に対して秘密にされる。ファンシーの衝動は、Mellstock の牧歌的な世界の中でいわば抑制されたといつてもよいだろう。A Pair of Blue Eyes (1873) において、Elfride の恋愛には、彼女の他の男たちとの恋愛の過去が常に影のようにまとわりついて、彼女の現在の衝動的な恋愛に不吉な影を落とし、やがて悲劇の方向へと彼女を押し進めてゆく。『狂乱の群れをはなれて』では、田舎を体現する Oak が最終的に、衝動的な誤った結婚をした Bathsheba と再婚することによって、いわば田舎が勝利を収める。『エセルバータの手』の次に連載発表した *The Return of the Native* (1878) においては、帰郷者 Clym に都会的な幻想をまとわらせて眺めていた Eustacia は、価値観の違う彼との結婚を手掛かりとして、唾棄すべき呪わしい Egdon から脱出して都会 Paris へ行きたいと考える。エセルバータは、ある意味ではこのユーステイシアと同じで、結婚を、自分を含めた家族たちの社会的な階級を押し上げるという目的の手掛かりとしているのである。藤田 繁氏のいうように、エセルバータの結婚は、相手を選ぶことによって歴史的過去へもしっかりと根差した由緒ある「家」を手に入れるという目的の手段なのである⁵⁾。

エセルバータは家庭教師としてペザウィン家に上がり、そこでその家の息子と恋に落ち、ペザウィン卿の反対を押し切って結婚するが、それによって彼女に好意を寄せていた Christopher Julian を結果的に袖にしてしまう。物語の始まりの時点で、そこまでは既に過去の出来事となっているが、実はその過去の出来事において、エセルバータはペザウィン家の息子とクリストファーのふたりについて、結婚相手の選択を行ったといつてよかろう。本来ならば、この物語の枠組を超えて過去に遡った出来事が、ロマンスの物語としての中心となるべきものであるが、物語の始まりの時点で、エセルバータは既に未亡人の若きペザウィン夫人となっているのである。4人の求愛者とエセルバータを巡って

5 「エセルバータにとっては、いかなる家に住みつくかまでが問題であった。」「『エセルバータの手』『熱のない人』—ハーディにおける〈今日〉の問題—」、大沢衛・吉川道夫・藤田繁編、『20世紀の先駆者トマス・ハーディ』（東京：篠崎書林、昭和53年）、p.199.

の物語は、見かけ上は4人が身分ある若きペザウィン夫人の「手」を求める物語であるのに、作品の題名では「エセルバータ」となっている点が、アイロニカルといえるだろう。前述したように、エセルバータはもともと召使の娘に過ぎず、ペザウィン夫人としてのエセルバータは、ペザウィンの息子との衝動的な結婚によって作られたいわば仮の姿なのである。物語冒頭の鷹と野鴨の追跡のシーンのイメージから考えれば、利口な野鴨が水面に顔を出したり引っ込めたりするように(p.38)、エセルバータは、その本来の素性と「ペザウィン夫人」としての自分の姿を現したり隠したりしているのである。

エセルバータは、家庭教師であった彼女に恋していたクリストファーとヒースの野で偶然に再会するが(Chap.1)、彼との再会は、彼女にとってはいわば過去の出現となる⁶⁾。彼を含めて4人の求愛者の中で、クリストファーは、エセルバータにとって過去の自分のアイデンティティを、失われてしまったかつての自分を、偲ばせる存在となっているといえるだろう。ペザウィン家と同じような裕福な家柄であったジュリアン家(もっとも医者の家柄だが)は没落して家を失ってしまい、クリストファーは音楽で身を立てながら妹と二人でつつましい生活を送っているが、そのクリストファーの現在の姿は、他でもないかつて家庭教師で身を立てていたエセルバータ自身の姿と重なっているのである。しかしながら、そのエセルバータのクリストファーとの「過去」は、エルフライドの場合とは違って、彼女の現在を脅かすものとはならない。むしろ、ラウンド・キャラクターとして貴族夫人に変貌してゆくエセルバータの過去の一つの側面を示すものであるといえるだろう。

III

彼女が心から愛しているのは、他でもないこのクリストファーであるということは、物語の展開の発端となる彼女の匿名の詩集が、わざわざ彼のもとに送られていることからはっきりしており、また物語の中でも繰り返し言及されていることであるし、さらにまたストーリーの緊張を保つ上でも必要なことでもある。それではなぜ過去の時点で、エセルバータは結婚相手としてクリストファーを選ばず、ペザウィンの息子を選んだのであろうかという疑問がわいて

6 '...: out of the past comes Christopher Julian, a former sweetheart, into Ethelberta's present.', Bert G. Hornback, *The Metaphor of Chance: Vision and technique in the Works of Thomas Hardy* (Athens: Ohio University Press, 1971), p.57.

くる。再会したクリストファーに対して、エセルバータは次のように言っている。

‘... You never knew half about me; you only knew me as a governess; you little think what my beginnings were.’ (p.40)

実際、エセルバータは、自分の出自を完全なほどに秘密にしているが、その彼女の秘密が、結婚相手としてクリストファーではなくペザウインの息子を選ぶことへの理由にはさほど成り得ないであろう。もしそれが大きな障害と成り得るのであれば、むしろペザウインの息子との結婚の場合にしか考えられないのである。ペザウイン卿の、息子とエセルバータの結婚に対する強い反対と怒りはそこにあったといってもよい。エセルバータは、最終的には年老いたマウントクレア卿(Lord Mountclere)と再婚するが、その決心は貴族である彼の財産と地位に基づいたものである。もし、彼女のペザウインの息子との結婚が、マウントクレア卿との再婚と同じ心理と打算でなされたものであったのなら、彼女にとって、結婚とは最初から上昇指向の手掛かりでしかなかったのだといえるだろう。ペザウインの息子との結婚も、医者の家柄であるジュリアン家とペザウイン家とを秤に掛けた、打算以外の何物でもなかったかもしれないのである。

エセルバータは、クリストファーとの再会の後、明らかに彼のことを念頭においたと思われる詩集を彼のもとに送るが、そうすることによって、過去のほのかな恋愛のエピソードが現在に復活することになる。詩集が彼女の「手」によるものであることは、イニシャルの‘E’と詩の内容から、クリストファーには極めて明白なことであり、彼は彼女の「手」による過去を歌った詩によって、忘れていた過去の感情を呼び覚まされるのである。そうして純愛の細い一本の糸が物語全体に通ることになるが、その純愛は辛辣に眺めれば、エセルバータの策略めいたポーズに過ぎないといえるかもしれない。クリストファーの妹が女としての立場から兄に考えを述べたように、既婚夫人ならば当然すべきではないことをエセルバータはしてしまったのである。

‘Would it not be a singular thing for a married woman to do? ...’ (p.48)

家を失って音楽で身を立てているクリストファーには、もはやエセルバータが求める経済力は無く、彼女は彼を結婚相手ではないと決めている。それにもかかわらず、詩集を送りつけたり、舞踏会での演奏にわざわざ彼を招いているのである(Chap. 4)。ではなぜクリストファーにわざわざ詩集を送り付けて、彼をつなぎ止めようとしたのかということになるが、昔の恋心が蘇ってきたとい

うばかりでなく、エセルバータに、妹の Picotee を彼と結ばせる意図が生まれたからではないだろうかということが考えられるだろう。なぜなら、妹に詩集の発送をさせれば、クリストファーが、謎めいたイニシャル‘E’のついた詩集の送り主を捜し出そうとすることは当然ながら予測できるからである。その時に浮かび上がってくる人物は、もちろんピコティということになるはずである。姉であるエセルバータからすれば、初なピコティがクリストファーに夢中になるだろうということはある程度予測できることであるし、妹をクリストファーと結ばせるためには、彼を付かず離れずに引きとどめておかななくてはならない。クリストファーは、極当然のように詩集の送り主を捜し出そうとし、詩集を郵送したピコティをエセルバータの妹とも知らずに、彼女と何度も顔を合わせる。その内に、ピコティはいつのまにか自分が彼を恋し始めていることに気づくのである(Chaps. 2-3)。

妹とクリストファーを結ばせることは、かつて彼を袖にしたことに対する代償的行為と考えることが出来る。しかしながら、本来エセルバータには、野心的ともいえる上昇志向と経済上の理由以外⁷⁾、彼との結婚を思い止まる理由はないのである。彼女以外の家族は、ほとんど誰もが現在の境遇にある程度満足しているのであり、それ故エセルバータの家族のための犠牲的精神は、偽善的ですからある。父は召使であることに満足しており(‘I have been in service now for more than seven-and-thirty years,... It is an honourable calling;...’, p. 217)、兄の Sol は「お前は自分の階級に固守すればいい、俺たちは俺たちのを守る」(‘..., you keep to your class, and we’ll keep to ours.’, p.134)と言ってエセルバータに対して強い反感を表明し、母もエセルバータの考え出したロンドンでの生活に強い不安を示すのである(‘I am so uneasy about this life you have led us into, and full of fear that your plans may break down; if they do, whatever will become of us?’, p.174)。家族の者全てを経済的にも身分的にも上に押し上げるという偽善に満ちた野心は、実は、結婚相手としてペザウインの息子を選んだことによって生じた、もはや後には引けないという心理が後押ししているものに他ならないであろう。いったん上流の社会を知ってしまった、

7 ‘She is the most worldly, ruthless and ambitious of all Hardy’s heroines, certainly more dangerous than the dissipated old aristocrat who is her adversary.’, R.H. Taylor, p.64.

「気位のととても高い」(So lofty - so very lofty!, p.120)「自立心の強い」(one of the independent sort, p.121)エセルバータは、もう後戻りすることができないのである。そこに自己のアイデンティティの喪失者の姿を見ることが出来るが⁸⁾、それは次作『帰郷』に登場するクリムに悲劇的な様相を帯びさせて発展させられているといえる。

詩集を出したことが姑のペザウィン卿夫人の知るところとなり、怒りを買ってしまったエセルバータは、遺産相続の望みを断ち切られてしまう。それがためにロンドンにおいて収入を得るべく、「物語の語り手」(Story-teller, p.114)として朗読会を考え出す(Chap.13)。「若きペザウィン夫人」たるエセルバータは、上流の社会において軽蔑されることを恐れ自分の出自を秘密にせざるを得ないために、家族の者に自分とのつながりのことは決して口外せぬよう箝口令を敷き、さらにロンドンに自分の家族を呼び寄せても身分ある貴婦人とその召使の関係を演出する(Chap.15)。彼女が「物語の語り手」として迫真の物語を語る姿は、彼女が実生活において「若きペザウィン夫人」を演じている姿と重なっているといえるだろう。物語りの「騙り」によって聴衆を迫真に満ちた虚構の世界に誘うように、彼女はその上流の社会という実生活において虚構の「若きペザウィン夫人」を演じることにより、4人の求愛者をその彼女が作り出した世界に誘っているのである。

経済力のないクリストファーは、結婚の相手としての候補からは外れ、残るのは画家のレディウェル、成り上がりのような廃馬屠殺業者ネイ、そして老人で品行の悪いマウントクレア卿の3人となるが、若い情熱に駆られて素性のよくない自分を妻にしてくれた亡き夫と同じように、今度は老齢ということで素性にもはや構うこともないマウントクレア卿を選ぶことになるのである。クリストファーとの純愛というポーズの裏には、そして家族に対する葛藤と自暴自棄ともいえる自己犠牲の裏には、したたかともいえるまでの上昇志向の打算があり、召使の娘であるエセルバータの「手」は、まるで策謀家のそれのように、全ての裏に及んでいるのではないだろうか。ただ彼女に対して多少斟酌すれば、彼女の策謀は、プライドと自立心の人一倍強い彼女が上流社会に身を投じたが故に、半ば無意識のうちに働いている自己保身の本能として生まれているもの

8 「ハーディが常に問題にしたのは、アイデンティティであった。」、前掲 藤田繁、p.198.

といえるかもしれない。

「数章からなるコメディ」(A Comedy in Chapters)とサブタイトルの付けられたこの『エセルバータの手』は、ペザウィン夫人の「手」を求めているながら、実は召使の娘でしかないエセルバータの「手」を求めているに過ぎない皮肉と同時に、下層の人間であるしたたかな彼女の策略が「手」として縦横に張り巡らされていて、その「手」に翻弄される上流の4人の男たちの姿が滑稽に描かれているといえるだろう。その意味では十分にコメディとなり得ている。

IV

上流社会の人間たちが、ペザウィン夫人となっている召使の娘エセルバータに惹かれ翻弄される。その点で、風習劇を模したこの作品は、上流の社会に対する痛烈な皮肉となっている。女好きの執拗なマウントクレア卿が、結局はエセルバータの「手」を受けるが、物語の冒頭での鷹と野鴨の追跡の場面で暗示される、エセルバータと4人の男たちの追跡のイメージは、結末ではむしろ逆にエセルバータが鷹のイメージになっているといえるだろう⁹⁾。愛人を持つマウントクレア卿に捕らえられたはずのエセルバータは、結婚後彼を押えつけて支配し、屋敷内の合理化を徹底して一切の無駄を無くしてしまうのである。捕らえたはずのエセルバータに、逆に押えつけられてしまう老齡のマウントクレア卿の姿は哀れなほどに滑稽なものとなっている。Joe Fisherが触れているように、結婚後のその二人の生活の変化、支配関係の変化に、社会構造の変化を重ねて読み取ることも可能であろう。衰退してゆく貴族階級が、勢力を得てきた下層階級の人間に入り込まれて、上下の構造が逆転してしまうのである¹⁰⁾。

しかしながら、そうした社会構造の逆転のパターンの前に、階級を超えて蠢いている、男と女の関係の根底にある性に基づくダイナミズムを無視するわけにはゆかない。エセルバータがあらゆる年齢層の様々な男たちの目を惹くのは、彼女が捉え処のない個性を持つ才色兼備の若い女性だからである。彼女が、家庭教師として洗練された女性となったのは、男たちのおかげであるといっても

9 'In short, Ethelberta is to be associated with *both* duck and hawk, for she is not only the pursued (by no fewer than four admirers) but also the pursuer (of knowledge, of fame, of a rich husband).' Peter J. Casagrande, *Unity in Hardy's Novels* (London and Basingstoke: Macmillan, 1982), p. 122.

10 *The Hidden Hardy* (London and Basingstoke: Macmillan, 1992), pp.63-81.

よい。

‘...it is through her being of that curious undefined character which interprets itself to each admirer as whatever he would like to have it. Old men like her because she is so girlish; youths because she is womanly; wicked men because she is good in their eyes; good men because she is wicked in theirs.’ (p.92)

She became teacher in a school, was praised by examiners, admired by gentlemen, not admired by gentlewomen, was touched up with accomplishments by masters who were coaxed into painstaking by her many graces, and, entering a mansion as governess to the daughter thereof, was stealthily married by the son. (p.33)

生まれ育ちにもかかわらず、彼女の美貌と才能は最初から上流社会の特に男たちの注意を惹きつけていたのである。ペザウインの息子が親の反対を押し切って彼女と結婚をしたのもそのためだからであり、衝動に駆られ求愛する男たちは、彼女が心配するほど彼女の秘密である生まれとその家族のことを意に介していない。4人の上流社会の求愛者たちが、彼女を求めるのは、彼女の「魅力」(many graces)のためであり、下層社会の人間の目からすれば、いかに上流社会の男たちといえども、階級には関わりのない女性の根源的な「魅力」にいつも簡単に振り回されてしまう姿は、滑稽さにしか映らないのである。そのエセルバータの「魅力」が、その才能にも増して性的な「魅力」であることは容易に察しがつく。男が中心であるともいえる上流社会で、エセルバータは、ちょうど Defoe の Moll Flanders のように、その才知と女としての「魅力」によって男たちを操っているのである。求婚を受けるエセルバータの「手」が、いつのまにか男たちを操る「手」に変貌しているのである。また、アイデンティティの喪失者としてのエセルバータが、結婚によって自分のアイデンティティを得ようとしているとも考えることが出来るだろう。結婚受諾の「手」は、「手」を求めて集まる男たちの中から選ばれた者に差し延べられるが、そうして決まる結婚相手の男によって自分の身分や地位が決まってしまうのであり、その意味ではフェミニズムの問題にも関わる近代的な問題を孕んだ作品であるともいえる。「人生は戦いだ」(Life is a battle, p.136)と考えるエセルバータは、挫けそうになりながらも、入ってしまった上流の社会の中で、才知を働かせてマウントクレア卿夫人の地位を勝ち得たのである。

連載物の「うまい書き手」(a good hand)たるハーディは、その「手」によって『エセルバータの手』という喜劇作品を生み出し、上流社会の上品ぶりや偽善性、俗物性を揶揄しているともいえる。作品中、エセルバータは、デフォーの作品は「語り」によって素晴らしい迫真性を生み出すと述べているが¹¹⁾、このエセルバータのように、ハーディは、連載という「語り」によって、読者に「騙り」を仕掛けていたのである。エセルバータの「手」は、ハーディの「手」でもあり、エセルバータがその「手」によって、自分の素性を韜晦し続け、4人の求愛者たちを翻弄したように、そして、廃虚と化した Corvsgate Castle のイメージとだぶる旧貴族の権化たるマウントクレア卿と結婚して彼を支配してしまったように、ハーディもまたその「手」による作品によって、旧の観念や道徳律が支配する偽善に満ちた読書界に挑戦しようとしたともいえるだろう¹²⁾。

11 “Now did you ever consider what a power De Foe’s manner would have if practised by word of mouth? Indeed, it is a style which suits itself infinitely better to telling than to writing, abounding as it does in colloquialisms that are somewhat out of place on paper in these days, but have a wonderful power in making a narrative seem real.”, pp.114-5.

12 ‘If Hardy’s professional and social aspirations are indeed displaced on to Ethelberta, he offers a clear justification of his financial project here: the aim of successful deception is, quite straightforwardly, to intrigue your way into the Structure at the highest possible level and then exercise as much control as possible. In this sense Ethelberta’s acceptance, for practical purposes, of the existing structure and her strategy of corrupting it by making herself a desirable commodity exactly mirror Hardy’s novelistic practice.’, J. Fisher, p. 80.